

楽しいお話で自然に覚える

先生の口から語られるお話は、テレビ以上に、子供を引きつける力をもっている、と私は思っています。

子供の心の動きに関係なく、どんどんと進められていくテレビ物語よりも、子供と問答をまじえながら、子供の心の動きをつかみながら進めていくことのできる“生”のお話は、子供にとって楽しくないはずがありません。

子供の反応を伺いながら、子供の、ともすればそれようとする心を、話に引っ張り込む努力をして、お話を進めていくことは、大変なことはありますが、それだけにやりがいのある仕事だと思います。

また、お話の種がすぐ尽きてしまって困る、という嘆きもよく聞きます。これは、“話のつぎ木”をなさったらいかがでしょうか。

その一例として、一寸法師を桃太郎に“つぎ木”した、“一寸柿子”のお話を紹介しましょう。

昔、昔、大昔、ある所に、お爺さんとお婆さんが住んでいました。お

爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。(ここまでくると、今までかたずをのんで聞いていた子供たちは「知っている」「桃太郎さんの話だ」と口々に言い出します。そこで、「そう、桃太郎さんのお話とそっくりだね。でも、これは、桃太郎さんのお話ではありません。これから違って来るから、よく聞いてね」と言って、子供たちをなだめます。)

ある日のこと、お爺さんが柴刈りをしていると、柿の木に、赤い、大きな柿の実がなっているのが目にはいりました。

お爺さんはそれを見ると、食べたくなりました。そこで、お爺さんは、木に登っていきました。

お爺さんの手が、もう少しで柿の実に届くというところで、柿の実が、ポターンと落ちてしまいました。そして、コロコロ、コロコロと下のほうへ転がっていきました。

お爺さんは、急いで木から降りて、「こらこら、柿や、待て待て」と言いながら、柿の実を追いかけ始めました。でも、お爺さんは、年取っていて、速く走れないので、とうとう、柿の実が見えなくなってしまいました。

お爺さんは、がっかりして、追いかけるのを止めて、おうちへ帰っていきました。

さて、お婆さんは、川で洗濯をすませ、うちへ帰って、お爺さんの帰りを待っていました。すると表の戸がコトンと音を立てました。「あ、きっとお爺さんのお帰りだよ。」

お婆さんは、「お爺さん、お帰りなさい」と言いながら、戸を開けました。ところが、そこにはお爺さんがいなくて、赤い、大きな柿の実が転がっていました。

「おや、まあ、こんな所に柿の実が。だれが持ってきてくれたんでしょうね」。お婆さんは、柿の実を拾って家に入り、お爺さんの帰るのを待っていました。

そこへ、「ただ今」と言ってお爺さんが帰ってきました。(中略)二人で仲良く二つに切って食べようとしますと、柿の実が真中から二つにパッと割れて、中から、かわいらしい赤ちゃんが生まれてきました。赤ちゃんは女の子でした。

柿から生まれたので、柿子という名前を付けました。柿子はいくつになっても、生まれた時より大きくなりませんでした。一寸くらいしかあ

りませんでしたので、皆が“一寸柿子”と呼ぶようになりました。

お爺さんとお婆さんは、ある日、神様にお祈りしました。「どうぞ神様、うちの柿子を大きくしてください。」

すると、ある晩、夢の中に神様が現われて、「都へ行きなさい。都に一寸法師がいて、それが柿子を大きくしてくれるだろう」と敢えてくれました。

年を取ったお爺さんとお婆さんにはとても遠い都までは、歩いていくことができません。小さな柿子が歩いていくのは、なお大変です。三人は困ってしまいました。

そのうち、柿子ちゃんが、「私にいい考えがあります。お爺さん、私に風船を買ってきてください。お婆さんは、私に針を一本ください」と言いました。(中略)

柿子は風船に至って、空高く上っていきました。風船は都に向かって飛んでいきます。空からのながめはとてもきれいです。柿子ちゃんは、あっちこっちながめて楽しんでいました。

そのうちに、空か曇って、雨が降り出しました。柿子ちゃんは、頭からビショ濡れになりました。雷がゴロゴロと鳴り出しました。それでも、

柿子ちゃんは元気に都のほうへ向かって飛んでいきました。

雨が止んで、お日柿がニコニコ顔を出しました。きれいな虹が出ました。柿子ちゃんは虹の橋を越えて飛んでいきました。

ところが大変です。鳩が飛んできたのです。柿子ちゃんは小さいので、鳩にひと口で食べられてしまいます。さあ、柿子ちゃんはどうしたでしょう。

柿子ちゃんは、お婆さんにもらった針で、鳩をチクリチクリと刺しました。鳩は「痛い、痛い」と言って逃げていってしまいました。(中略)

柿子ちゃんはとうとう都の空まで飛んできました。きれいな家がたくさん見えます。柿子ちゃんは、風船の空気を少しずつ抜いて下に降りました。(以下略)

お話の筋は、その時の思い付きで、どうはこんでいこうと、話し手の勝手です。実際、このお話も本書の別巻「お話のお手本」カセットに収録した“一寸柿子”とは少し筋が違っていています。しかし、本を読んで聞かせる場合とは違った変化が、幼児にとって大変な魅力となります。

子供たちの心を引きつけるためには、時々質問をするのもよいと思います。「柿から生まれた赤ちゃん、何という名前を付けたと思いますか」とか。

また、「お婆さんが、お爺さんのお帰りだと思って戸を開けると、お爺さんではなくて柿の実だった」という所で、「お婆さんは戸を開けました。ところが、そこにはお爺さんがいなくて……」と言って、そこでちょっと休み、子供たちの顔を「さあ、何だろう」というように見回しますと、いつも(たいてい)子供たちの中から「柿の実」という声が飛び出します。

ころころ転がって行って、見えなくなってしまった柿の実が、ここに再び登場してくることを、子供たちは期待しているのです。

物語から、柿の実は消えてしまったのですが、子供たちの頭の中には、ちゃんと残っていて、いつでも出てくるチャンスをとらえているのです。

子供たちは、ただ受身で、先生の話の聞いているのではないことが、こういうところでよくわかります。いろいろ推理を働かしながら、時には話し手よりずっと先のほうまで進んで、「早く来ないかな」と言わ

んばかりに、待っている犬のように、先回りしているのです。

先生のお話をただ聞くというだけでなく、このように、推理しながら聞くというようになりますと、子供の頭の働きはすばらしく良くなると思います。

こういう聞き方をする子供は、全神経をお話に集中して聞いています。心が決してよそにそれたりなどしません。長い物語でも、決して飽きたような顔を見せません。

こういう子供に育てるためには、子供の一人一人に語りかけるようなつもりで(事実、一人一人に顔を移して、子供の目をちゃんと見て話すようにします)話しますと、子供のほうもそれに必ず反応してきます。

落ち着いて、人の話を注意深く聞ける子供を育てるのは、先生の責任です。先生の、毎日の話し方の上手下手が、子供の“話を聞く態度”を作るのです。先生は“話し方”の工夫をすることに努力しなければなりません。